

ことが必要であり、遠い昔の医師の行っていたことから最近までの医師のあり方を、駆け足で繰り返すことが求められるのではなからうか。ここに医の歴史を学ぶ必然性がある。」と書き記したことがある。

また日本の大学には医史学の講座がないため(あるのは順天堂大学のみ)、技術者の医師が世に送り出されるともいわれている。

医史学のもつ意義とその責務は大きい。本書はそれらに應(こた)え得る質の高い良書である。

医を学ぶ者、医に関係ある仕事にたざさわる者は勿論、科学史に興味ある方の、是非の一読をすすめて止まない。

(荒井 保男)

〔医歯薬出版、東京都文京区本駒込二一七一〇、電話〇三—五三九五—七六〇〇、二〇〇六年三月、B五判、八四〇〇円〕

池田文書研究会 編

『東大医学部初代総理池田謙齋池田文書の研究(上)』

1

本書序文に記されたように池田文書研究会は昭和六一年七月に結成された。以来二十年間、ほぼ毎月一回、順天堂大学の一室に会し、酒井シヅ教授を盟主とする翻字編纂をしてき

た。このたびその成果を世に問うことになった。

この紹介記事が編纂実務と解題・註釈を執筆した酒井シヅ・深瀬泰旦・遠藤正治の三氏によつてではなく、この研究会に当初より参加できた一人ではあるものの、福沢諭吉のいう「筆とる職人」並の翻字に終始した小生がその役割を担うとは、いささか忸怩たるものがある。

いうまでもなく明治期の天皇制国家の建設と、それに参画した幾多の人々に関心を深める研究者によつて、いずれ本書の評価はなされよう。本書には、池田謙齋の履歴からみて、特に医学教育・軍医制度と皇室待医局に関わる制度の成立過程と、これと表裏をなす人事や治療等について、示唆に富む新史料が収められている。紹介する所以である。

本書の第一部には池田謙齋の養父池田多仲宛書状を収める。その書状は伊東玄朴・大槻俊齋・緒方洪庵等十名からの来状、全七九通である。

池田多仲は津和野藩医池田淳作の長男で、江戸に出て伊東玄朴に入門(玄仲と名乗る)。その縁で江戸の蘭方医達が経営する、お玉ヶ池種痘所医を勤めた。種痘所が文久元年(一八六一)に幕府の西洋医学所(後に医学所)となったことから、池田多仲は幕臣となる(深瀬泰旦氏著『天然痘根絶史』、二〇〇二年、思文閣出版刊)。

第二部が池田謙齋宛書状である。このたびの本書上巻には発給者四一名の全五五七通を収める。

池田謙齋(天保十二年、一八四一—大正七年、一九一八)

は越後蒲原郡中之島村入沢健蔵の次男で江戸に出て、幕府医学所頭取緒方洪庵に入門、幕命による長崎留學にてポードインに師事。維新後は新政府の病院医師となり池田多仲の娘と結婚し、明治二年に池田家の家督を相続。明治三年から九年までドイツ国に留學した。

帰国後の謙齋の生涯は陸軍軍医監・東京大学医学部・宮内省侍医局の三分野に関与し、その制度創設や人材養成に尽力したので、多岐にわたる人脈が形成されたのである。

したがって謙齋宛の書状は、右の三分野に属する頭官、および親族郷党の入沢家・竹山家等の来状が中核である。

三分野のうち、第一の陸軍関係者の代表例（書状数）をあげると、石黒忠憲（四六通）、橋本綱常（二十通）等の第二の東京大学関係者では加藤弘之（六三通）、また、東京大学医学部総理心得として、後に明治八年から明治二十四年まで、内務省の初代衛生局長に在職し、医療行政の当事者であった長与専齋（六五通）が注目されよう。第三には侍医および各宮家・華族からの一群の書状がある。

維新前には令制下宮内省に典藥寮という医療従事者を統括した伝統的な官司があった。維新後には明治八年一月の官制改革（典医制廃止）、明治十八年十二月の内閣制度の発足による明治十九年二月の官制改革（職制・等級制度確定）があった（遠藤正治氏編「明治期侍医制度の成立と変遷」、一九九二年、池田文書研究会資料）。

明治天皇周辺の医師には、始め朝廷・幕府での経歴者と、

維新後に採用された西欧医学の体現者とが混在する。例えば朝廷典藥寮医師の出自をもつ高階経徳（三八通）、伊東玄朴の養嗣子伊東方成（三四通）がいる。

伊東方成は維新後、政府の命によってオランダ・ドイツに留學（眼科専攻）、明治七年の帰国後は謙齋とほぼ同様な進路を累進するが、明治十九年の官制改革に際して伊東方成が侍医局頭を退き、九歳若い謙齋が新名称の侍医局長官に就任する。

ついで相磯慥（五通）の例にみるごとく、東京大学医学部卒業者を採用する人事に切り替えられていく。なお、この相磯慥について、国立歴史民俗博物館樋口雄彦氏の御教示によると、会津藩松平家の家中の子で、明治十年代に伊豆国君沢郡木負村（現、沼津市）の相磯格堂の娘婿に入ったという。明治十五年に東京大学医学部を卒業。岐阜県病院長をへて、明治十九年にドイツ留學。明治二年に侍医。明治三六年には再度ドイツ留學。帰国後に侍医。大正十三年免官。かくて侍医局に東京大学出身者採用という人事を推進したのが、侍医局長官池田謙齋といえる。

2

昨今は松本順の言説に関心をもち、『蘭疇自伝』（小川鼎三・酒井シヅ氏校注、平凡社東洋文庫）とあわせて、本書の松本順書状（全九通）を改めて読む機会があった。

特に、年紀を欠く（4）の九月九日付書状（八九頁、年紀

を明治十四年と推定)は興味深い。軍医監と文部省雇いを兼務していた橋本綱常の「検閲使」任命人事に対して、謙齋が苦情を申し入れたので、松本は強硬な談判状を送りつけた。注目されるのは松本の陸軍至上主義と綱常愛顧。反面、大学教育優先をいう謙齋の姿勢。松本は謙齋のいう「昨年御口約」に反発したのである。これが本書状。

『蘭疇自伝』(明治三五年刊)で松本は、明治十年帰国直後の綱常処遇に反発する西南戦争従軍医師団を叱責する際、前年帰国の謙齋の学力と地位に言及。綱常優位を断じ、内閣の謙齋重用は誤りと難詰した。側杖を喰ったのは謙齋。以後、右書は両者比較論の起因を提供したことになろうか。

また、松本順のバイヤス眼を通さない、綱常と謙齋との交流、かつ、謙齋の面倒見の良さの本性が窺える橋本綱常書状(明治十年一月五日付、七五頁)も注目される。

史料を読むとは「鐘は撞木の当たりやう」であり、研究者の覚悟が求められよう。よって本書自体も引用や傍証の根拠たりうる史料集であろう。

(岩崎 鐵志)

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二一七、二〇〇六年二月、A五版、三三〇頁、本体六八〇〇円〕

寺畑 喜朔 編

『絵葉書で辿る日本近代医学史』

本書は、著者が所蔵している絵葉書約一三〇〇枚中、約八〇〇枚をテーマ別に収載した著作で、『絵葉書で辿る日本近代医学史』という大変魅力的なテーマが、眼を引く。言葉で説明するよりも、視覚に訴えることは、相手に同意を得やすいことであり、事実、色彩学では感覚うち八〇%以上を視覚で占められるという見解がある程である。しかも、絵葉書という異なった理由で製作された媒体を、近代医学史という広域なテーマでまとめようとした著者の苦勞は、大変なものであつたらうと想像される。コレクションというものは、何かひとつ欠けても成立しないことは衆知のことであり、その苦勞は察つて余りあるものがある。

内容は、日本における中国医学の発達、西洋医学とくに和蘭医学の導入と開化、医育機関及び病院の勃興と推移(1)〜(3)、日本赤十字社と救護活動、薬とその周辺・衛生思想の啓蒙、日本医学会と日本医師会明治の西洋館・保存されている顕微鏡、「医」とはの九章に分かれ、章の前後に解説と絵葉書一枚毎に詳しい説明・分析が提示されている。絵葉書のはほとんどは一九四〇年以前であり、奥沢康正先生ら数名の先生方の史料提供・協力があつたことが記されており、すべてカラー版で、限定二五〇部の出版とのことである。ち